■研究調査レビュー

奄美大島『太家文書』訳稿

高津　孝（鹿児島大学法文学部）

平成16年10月28日から31日にかけて，徳之島と奄美大島の漢籍史料調査を行った。徳之島では伊仙町歴史民俗資料館，天城町ゆいの館，徳之島町郷土資料館を訪問し，それぞれ館長や担当の方々からお話をうかがった。奄美大島では，全村を回り，名瀬市立博物館，笠利町歴史民俗資料館，瀬戸内町郷土館を訪問し，瀬戸内町郷土館では漢籍の調査も行えた。名瀬では，奄美の歴史に詳しい弓削政己先生にお会いしてお話を伺えたが，太家資料という漢文史料の宿題を拝領することになった。

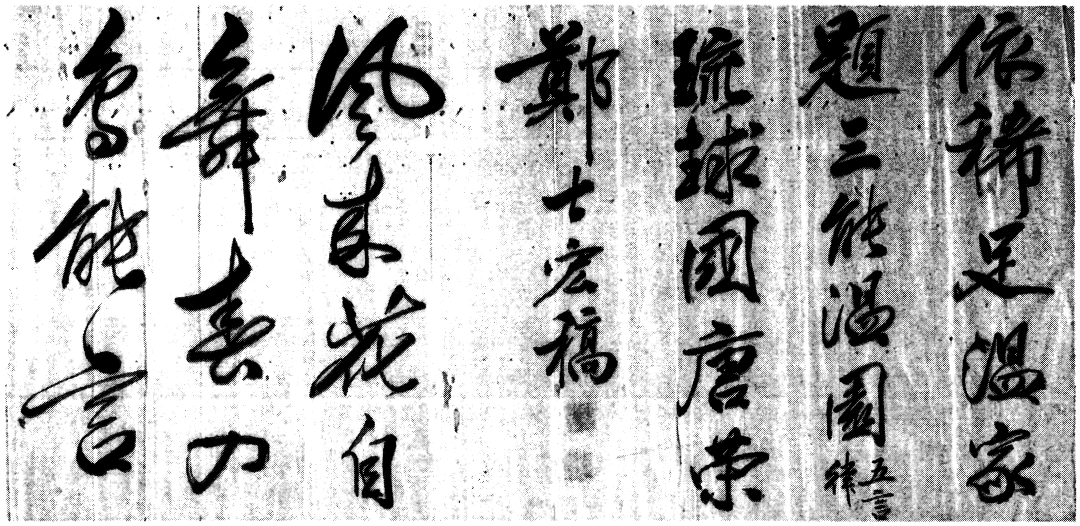
太（ふとり）家について，『鹿児島県の地名』（日本歴史地名大系47，平凡社，1998年）により，以下記述する。宇宿大親家譜系図（奄美大島諸家系譜集）によれば，同家一世の宇宿大親（童名は保元金）は大島の巨族であり，宇宿大親職（宇宿大屋子職）を勤め，三世の伊間（童名は犬樽金）は，隆慶６年（1572）に屋喜内（やきうち）大親職に就任している。この伊間の長男家が後に太家を，次男家が和（にぎ）家を称したという。俗謡に「屋家業一番な，ま東（ひぎ）や前織（まえおり）衆，うりが二番な，ま住佐応恕（すみさおじょ）衆，大和浜（やまとはま）三能安（みのあん）衆」とあり，明治維新前後，太家は，奄美を代表する大富農であった。和家は，奄美で最古のものとなる嘉靖８年（1529）の琉球辞令書を含む数十点の古文書を伝える。以下は，太家資料３点の書き下しと翻訳である。

一点目は，大和村中央公民館所蔵の太家文書59で，藤原公任『和漢朗詠集』からの抜き書きである。唐の詩人白居易の七言律詩の一部と平安時代の漢詩人大江朝綱の七言律詩の一部である。

清唳數聲松下鶴，清唳數聲　松の下の鶴，
寒光一點竹間燈。寒光一點　竹の間の燈。
（松の木の下にいる鶴が甲高い声で何度か鳴くのが聞こえ，竹林を透して寒々とした灯火が一つ見える）
（『和漢朗詠集』巻下・鶴「清唳數聲松下鶴，寒光一點竹間燈」，『全唐詩』巻四五八・白居易・在家出家「衣食支吾婚嫁畢，從今家事不相仍。夜眠身是投林鳥，朝飯心同乞食僧。清唳數聲松下鶴，寒光一點竹間燈。中宵入定跏趺坐，女喚妻呼多不應。」）

谷静纔聞山鳥語，　谷静かにして纔かに山鳥の語を聞き，
梯危斜踏峽猿聲。　梯危くして斜に峽猿の聲を踏む。
（谷は静まりかえりわずかに山鳥の鳴き声が聞こえてくる，桟道は高く斜面に沿っており足下から聞こえる谷間の猿の鳴き声を踏みつけるようである。）
（『和漢朗詠集』巻下・猿「谷静纔聞山鳥語，梯危斜踏峽猿聲」，『御物小野道風筆屏風土代　延長六年十一月内裏御屏風詩』大江朝綱・送僧歸山「一自方袍振錫行，別師還媿六塵情。雖觀秋月波中影，未遁春花夢裏名。谷静纔聞山鳥語，棧危斜踏峽猿聲。夜深莫歎迷歸路，定有霜鍾度嶺　（鳴）。」）

２点目は，『東京国立博物館図版目録琉球資料篇』に掲載されている民俗資料215「五律詩断簡」k39079である。琉球久米村の鄭士



『東京国立博物館図版目録　琉球資料篇』2002年による　　215 五律詩断簡　K39079

宏という人物の五言律詩「題三能温園」の八句目だけが残されており，その後に，唐代初期の詩人宋之問の「春日芙蓉園侍宴應制」という詩の五・六句目が続く。

□□□□□,
□□□□□。
□□□□□,
□□□□□。
□□□□□,
□□□□□。
□□□□□,
依稀足温家。　（第一紙（７行，行５文字）を欠いた断簡のため，正確な意味は不明）

三能温の園に題す。五言律。琉球國唐榮　鄭士宏稿。

風來花自舞，　風來りて花自ら舞ひ，
春入鳥能言。　春入りて鳥能く言ふ。
（庭園に風が吹き花はひとりでに舞いおどるかのようで，春になり鳥は言葉をしゃべるかのようである。唐・宋之問・春日芙蓉園侍宴應制「芙蓉秦地沼，盧橘漢家園。谷轉斜盤徑，川廻曲抱原。風來花自舞，春入鳥能言。侍宴瑤池夕，歸途笳吹繁。」（『全唐詩』巻五二））

３点目は，『東京国立博物館図版目録　琉球資料篇』に掲載された民俗資料218「再点眼供養記」k39082である。この史料は，奄美大島の与人太三和良が天保十二年（1841）十二月に福昌寺第六十三世住職慧實台巖のもとを訪ね，修理が終わった聖観音像に入魂開眼の儀式を依頼したことを記す。

【原文】

「大島與人太三和良叟／齎正觀音一躰來曰／此聖像者吾曾祖□／始所建立于家也今□／吾四代相繼尊崇不□／厥間救海難護家内／等靈驗不可勝言也／故曩歳吾曾彩飾焉／經年而金色身相漸／古矣茲歳恭爲奉賀／太守公襲休祥升進于／參議適航于大洋着于／麑城下先奏賀詞訖／乃訪佛工謀菩埵之彩／飾彩飾既成矣需点／眼於予予諾焚香開佛／龕便裁一偈拈筆曰依吾／筆力眼睛開妙色身光／忽照來三界衆生齊抵／掌頂誠應仰此蓮臺／夫觀世音者諸佛慈悲／之總躰而現三十二身／於六道具于四無畏滅七／難除三毒令満溢百福故／經曰衆生被困厄無量苦／逼身觀音妙智力能救／世間苦誠哉此言也叟勿／生疑焉叟復曰將石刻金／剛力士二軀以安置于薩埵／之左右如何予曰善哉〻〻／修理薩埵尚廣大利益也／況彫刻二金剛乎須知／薩埵之慈悲心上加金剛／之大雄力

218 再点眼供養記　K39082　『東京国立博物館図版目録　琉球資料篇』2002年による

則無上功徳／不可思議應無願不／成也叟歡喜退仍記／時天保十二年辛丑／十二月念二日／福昌巖慧實」。

【書き下し文】

大島與人太三和良叟，正觀音一躰を齎し，來りて曰く，「此の聖像なる者は，吾が曾祖□始めて家に建立する所なり，今□吾れ四代相繼ぎて尊崇し□せず。厥（そ）の間，海難を救ひ，家内を護る等の靈驗は言ふに勝（た）えず。故に，曩（さき）の歳，吾れ曾（かつ）て焉（これ）を彩飾す。年を經て金色の身は相漸（やうや）く古びたり。茲（こ）の歳，恭しくも太守公休祥を襲ね（『尚書』泰誓・中「襲于休祥」）參議に升進せる（天保九年）を賀し奉らんが爲に，適たま大洋に航し，麑の城下に着す。先に賀詞を奏じ訖り，乃ち佛工を訪ひて菩埵之彩飾を謀る。彩飾既に成れり」と。予に点眼を需むれば，予香を焚き佛龕を開くを諾し，便ち一偈を裁し筆を拈りて曰く，「

依吾筆力眼睛開，　吾が筆力に依り眼睛開き，
妙色身光忽照來。　妙色身光忽ちに照來す。
三界衆生齊抵掌，　三界の衆生齊しく掌を抵し，
頎誠應仰此蓮臺。頎（なが）く誠に應に此の蓮臺を仰ぐべし。

夫れ觀世音なる者は諸佛慈悲の總躰にして，三十二身を六道に現じ，四無畏を具し，七難を滅し，三毒を除き，百福を満溢せしむ。故に經に曰く，『衆生困厄を被りて，無量苦身に逼るに，觀音の妙なる智力は，能く世間苦を

救はん』（『法華経』観世音菩薩普門品）と。誠なるかな此の言や。叟疑いを生ずる勿れ」と。叟復た曰く，「石を將て金剛力士二軀を刻して以て薩埵の左右に安置するは如何」と。予曰く，「善きかな，善きかな。薩埵を修理するは尚ほ廣大の利益なるに，況んや二金剛を彫刻するをや。須らく知るべし，薩埵の慈悲心上に金剛の大雄力を加ふれば，則ち無上の功徳，不可思議なり。應に願の成らざるは無かるべし」と。叟歡喜し退く。仍て記す。時に天保十二年辛丑十二月念二日。福昌巖慧實。

【訳文】

奄美大島の与人太（ふとり）三和良（みわら）翁が，正觀音一体を持ってきて次のように述べた。「この観音像は，わたくしの曾祖父が始めて我が家に建立したものです。現在私まで四代にわたって厚く信仰しております。その間，海での遭難から家族を救い，家内を守るなど霊験あらたかで言葉で言い表せないほどです。そういうわけで，先年，わたくしがこの観音像に瓔珞などで飾りを施しましたが，永年の間に，金色のお体も次第に古びて輝きを失って参りました。本年，薩摩藩主島津斉興公が，吉事が重なり，参議に昇進されたことをお祝いするために，偶々船旅をして鹿児島城下に到着致しました。お祝いの言葉を島津斉興公に申し上げ終わり，やっと仏師を訪ね，観音像に飾りを施す相談を致し，それが終わりました」。わたしに開眼式（たましいいれ）を依頼されたので，わたしは，香を焚き佛龕を開くことを承諾し，偈を一首作り，筆を執ってこう申しました。「

依吾筆力眼睛開，　吾が筆力に依り眼睛開き，
妙色身光忽照來。　妙色身光忽ちに照來す。
三界衆生齊抵掌，　三界の衆生齊しく掌を抵し，
頎誠應仰此蓮臺。　頎（なが）く誠に應に此の蓮臺を仰ぐべし。

（わが筆力で観音像に魂が入り開眼し，佛の素晴らしい光明がたちどころに光り輝く。世間の人々は等しく手を打って喜び，末長く真剣にきっとこの観音像を仰ぎ見るであろう。押韻「開，來，臺」。）

そもそも，観音菩薩は，あらゆる仏様の慈悲を集めたものであり，三十二の化身を衆生の世界に現し，四無畏（大衆に説法しても恐れない四つの理由）を備え，多くの災難を滅し，三毒（貪りの心，怒りの心，迷いの心）を除き，幸福を溢れさせる。故に『法華経』観世音菩薩普門品にはこう述べられています。『人々が困難に遭遇し，大変な苦しみが身に迫ったとき，観音菩薩の素晴らしい智慧の力によって，世間の苦しみは救済される』。この言葉はまさしく真実である。ご老人よ，疑ってはいけない」。老人は続いてこう述べた。「石で金剛力士二を作成し，観音菩薩の両脇侍とするのはどうでしょうか」。私は「よいことですね。観音像を修理することだけでも無量の功徳があるが，まして金剛力士像二体を加えることはいっそうの功徳を積むことになります。観音菩薩の慈悲心に金剛力士の大雄力を加えるならば，無上の功徳が得られること表現も及ばないほどであることを知るべきです。きっと全ての願いごとは成就するでしょう」。ご老人は喜んで帰って行かれた。よってここに記す。時に天保十二年辛丑十二月二十二日。福昌寺第六十三世住職・慧實台巖。